長岡京跡右京第 1177 次調査 現地説明会資料

1 はじめに

本調査は、病院建設工事に先立って実施された発掘調査です。調査地は、西二坊大路に面する長岡京跡右京六条三坊三町の南西部にあたり、南側に六条条間南小路、西側に西三坊坊間東小路が隣接します。

調査では大型掘立柱建物とそれに付随する掘立柱建物、築地状の区画溝、柵(塀)等を確認しました。 出土遺物は瓦類が大半であり、特に長岡京の中でも東院や諸院などに限定される「旨」字の異体字を中心 に刻印した瓦が多数出土しています。また、遺構の配置などから二町以上を占有する宅地利用と考えられ、長岡京期後半段階における重要施設である可能性が極めて高い遺跡が発見されました。

今回の発見によって、長岡京跡の南西域ではじめて、大型建物をもつ大規模な宅地利用が明らかとなり、「長岡京」の構造解明に向けて大きな成果を得ることができました。

位置と環境:

調査地付近は北西から南東へと傾斜する低位段丘と氾濫原の境付近に位置します。特に南側は自然 流路堆積がひろがり、北側も六条条間小路付近に開析谷が確認されていることから、旧地形ではこの 付近は舌状の高まりとなっています。また、これまでの発掘調査によって、旧石器時代・縄文の遺跡で ある十三遺跡や複合遺跡の開田城ノ内遺跡、長岡京期から平安時代の建物や工房などの存在も確認さ れています。

調査期間: 平成 30 年 8 月 20 日~12 月 17 日 (予定)

調**杳面積**:約 1200 ㎡ (予定)

長岡京は、桓武天皇によって造営された都で、784年(延暦3年)11月11日に奈良の平城京から遷都されました。都の範囲は、 東西4.3キロメートル、南北5.2キロメートルにおよび、長岡京の政治の中心である大極殿、朝堂院などは向日市域に、「市」な どの経済の中心は長岡京市域に置かれていました。

2 調査の概要

本調査では、長岡京期の大型掘立柱建物をはじめ、掘立柱建物、築地状の区画溝、柵(塀)などが整然と並ぶ状況が検出され、長岡京跡右京六条三坊三町の宅地利用の様子が明らかとなりました。以下に主な遺構を紹介します。

(1) 主な検出遺構

①掘立柱建物 1

調査区西半で検出された大型掘立柱建物です。その規模は、桁行(推定)7間(約21m)、梁間2間(約6m)の南北棟で、西面に柱間10尺(約3m)の庇が取り付くと推定されます。本調査区では南北15m分が検出されています。それぞれの柱間寸法も10尺等間で建てられており、柱掘形は一辺約0.9m~1.0mの隅丸方形です。柱掘形の深さや構造は、身舎と庇で異なるようです。身舎の柱掘形は深さ約0.5m以上あり、柱痕跡は径0.4m前後で、底部に礎板(木の板)を配置しています。 庇の柱掘形は深さ約0.6mで、直径約0.3mの柱痕跡の残るものと、下端を杭状に尖らせた柱を用いた痕跡が見られます。また、柱掘形の大半には抜き取りの痕跡が見られ、抜き取り穴の一つには「旨」

字の異体字を中央に刻印した長岡宮式の軒丸瓦(写真3)が埋まっていました。

さらに掘立柱建物1のすぐ東側には、平行して幅約0.7mの溝1があります。建物と非常に近接していますが、雨落ち溝としての性格が考えられます。埋土からは多量の瓦と土師器・須恵器が出土しており、ここからも「旨」字瓦が複数点出土しています。

②掘立柱建物2

調査区の北東部で確認された掘立柱建物です。桁行(推定) 5 間(約 13m)、梁間 2 間(5 m)の東西棟で、庇は検出できませんでした。柱掘形は一辺約 0.8m の隅丸方形、柱痕跡 0.3m 前後を基本形とし、柱間寸法は、桁行が約 2.6m 等間、梁間が約 2.5m 等間となります。その内、西辺の柱列のみ柱掘形は径約 1.2m の円形を呈し、柱当たりに $30\sim40$ cm 前後の石材を $2\sim3$ 個を据えて根固めをしています。また、建物の内側には建物本体の柱より小さく浅い約 0.3m の掘形をもつ柱穴があり、床を支える東柱をもつ構造のようです。

③柵 (塀)

調査区の東半、掘立柱建物2から南へ約9mに位置する東西方位の柱列です。柱列は深さが異なる5基の柱穴で構成され、柱掘形の形状は南北に長い楕円形を呈しています。柱痕跡は0.2m程度ですが、4基の柱穴の底部には塼(瓦質のタイル)を据えており、柵(塀)においても高級な建物を思わせる精巧な基礎構造でつくられています。

④区画溝1·2·3

区画溝はそれぞれ幅 0.6m 前後の溝です。区画溝1と区画溝2は調査区の中央付近を南北に横断する溝で、2条の溝が約3.6m の間隔をあけて平行するように配置されています。また、その間には非常に残存状態が悪いですが、径約0.4m の小規模な柱穴4基も検出されています。一本柱塀や築地のような構造物であった可能性が考えられます。一方、区画溝3は、区画溝2の北辺から西へ1.5m の地点より東西方向にのびる溝です。詳細はわかりませんが、宅地内を区画するために区画溝1・2と一体的につくられたものと推定されます。

⑤溝2

調査区の西端にも南北方向の溝 1 条が検出されています。残存状態は悪く、幅 0.5m 前後、深さ約 0.05m しか確認できませんでした。調査区の西端付近は西三坊坊間東小路が推定されている場所であり、北端で Y=-28033.65 (旧座標) に位置します。これは、一町北側で実施した立会調査(立会 95274 次)で確認された条坊側溝の Y=-28035.4 (旧座標)と較べ、東に約 2m ずれていることになり、条坊側溝と断定することは難しい状況です。

(2) 主な出土遺物

本調査では現時点でコンテナケース 40 箱程度の出土遺物がありますが、その大半が瓦類で、須恵器や土師器といった土器片は僅かしか出土していません。その内、瓦類には軒丸・軒平瓦 20 点以上、塼 15 点以上が含まれていました。特に軒丸瓦には「旨」字を刻印する瓦とそれと同笵のものが合わせて 12 点以上確認できます。「旨」字は「勅旨」を表すことや、長岡京域の中でも東院や猪隈院推定地といった離宮などの諸院や諸寺などに出土地が限定されることから、宮域中枢部の造瓦集団が生産を担っていた可能性が高いとされています。また、塼の多くは破片ですが、出土事例の限られる珍しいものです。柵(塀)の柱穴に据えられた塼は、長さ 26cm 以上、幅 19.5cm、厚さ 7 cm の長方形状を呈しています。土器には、須恵器と土師器があり、須恵器杯の底面に文字が書かれた墨書土器も1点見つかっています。特に、土器の数は瓦に比べて非常に少ないことが、この調査区の特徴と言えます。

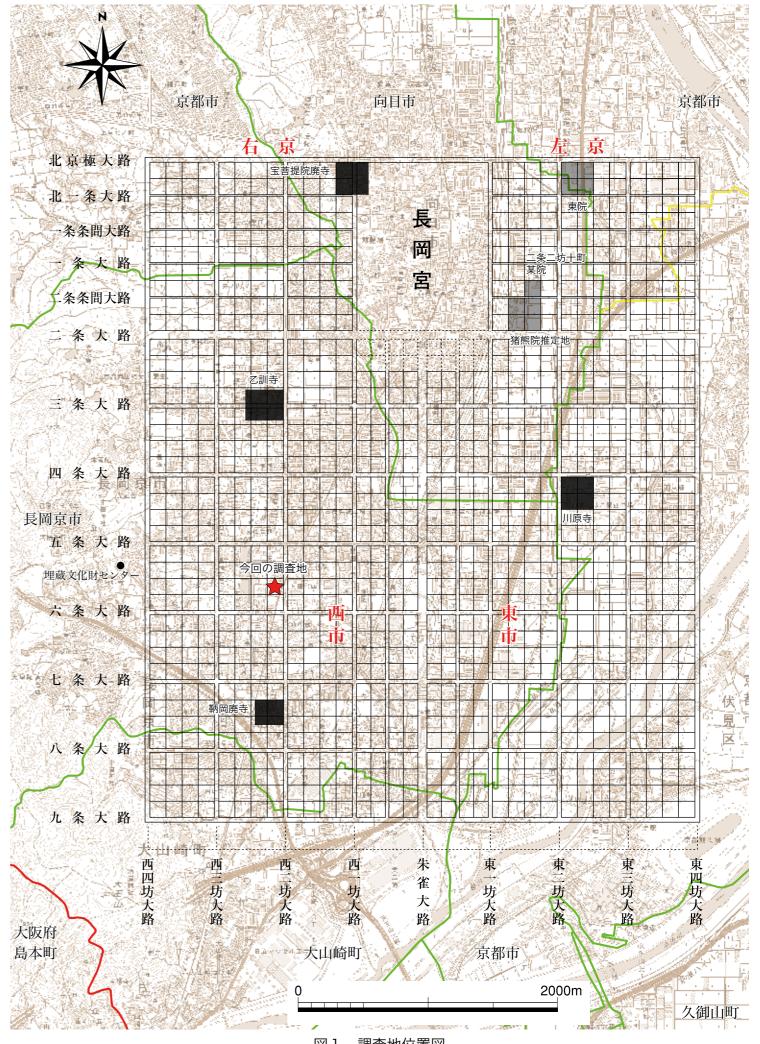
3 まとめ

今回の調査では、長岡京跡右京六条三坊三町の宅地内の状況が明らかとなりました。その結果、以下の ようなことかわかってきました。

- ①掘立柱建物1は、長岡京跡では最大級の建築基準である柱間10尺(2.96m)等間で建てられた桁行7 間の建物に復元できます。長岡京の南部域で現在確認されている最大の建物になります。
- ②掘立柱建物1の西面に庇が取り付く構造は、調査区の西側が中心的な空間であることを示唆しており、 東西2町を占有する宅地である可能性が高いと考えられます。西側隣接区画である右京六条三坊六町 の発掘調査でも、文化センター通りの拡幅工事に伴う右京第474次調査で総柱建物が見つかっており、 この建物の柱穴にも礎板や瓦が据えられていました。このことからも、右京六条三坊六町域と一連の 施設である可能性があります。
- ③区画溝1・2は、約3.6mの間隔で平行しており、一本柱塀或いは築地のような構造が推定されます。 また、この区画を境に西側の掘立柱建物1が10尺等間であるのに対し、東側の掘立柱建物2や柵(塀) などは8尺~9尺で設計されています。このことからも西側の空間の方がより中心的な側面をもつも のと推定されます。
- ④区画溝1・2の間の中軸から掘立柱建物1と掘立柱建物2は85尺(25.2m)で均等に割り付けられてお り、宅地全体が計画的に配置された施設である可能性が高いと言えます。また、遺構の密度も希薄であり、 整然と建物や構造物が並ぶような宅地利用の様子が想定されます。
- ⑤掘立柱建物2は、調査区北端にある包含層の上面から掘削されています。そのため、最低でも40cm以 上が後世に削られたと考えられます。一方で、旧地形は北から南へ傾斜しており、調査区の西半全体は瓦や 10cm~拳大の礫を含む土で整地した状況を確認できます。同じ町域内で実施した右京第 1042 次調査でも 瓦を敷き詰めた整地が確認されており、宅地全体或いは、建物付近を中心に大規模な造成を行うことができ る人物(組織)によって整備された施設であったことが推測されます。
- ⑥出土瓦は長岡京期後半期の勅旨系瓦を主体としており、その出土例が寺院以外では離宮などの諸院に 限定されていることから、長岡京域でも極めて高級な施設があったことが想定されます。特に、その出 土数は猪隈院推定地と同数程度です。
- ⑦右京六条三坊三町域は長岡京域では南西部に位置しますが、東側が西二坊大路に面しています。この 西二坊大路は、南は鞆岡廃寺、北は乙訓寺にそれぞれ面しており、京内寺院を繋ぐ主要道路であったこ とがわかります。

これらの状況から、この長岡京跡右京六条三坊三町域付近の遺構群は、全体の構成やその性格は不明 ですが、長岡京において極めて重要な施設であったと言えます。

長岡京は、条坊制と呼ばれる区画割りによって碁盤の目状に整備されていました。幅 24mの大路(おおじ)で囲まれた大区画 を「条(じょう)」と「坊(ぼう)」と呼び、さらにこれを幅9mの小路(こうじ)で16分割したものを「町(ちょう)」と呼びます。 一町は約120m四方の敷地で、宅地の基本単位となるものです。坊は朱雀大路を中心に右京、左京それぞれに一坊から四坊まで あります。



調査地位置図

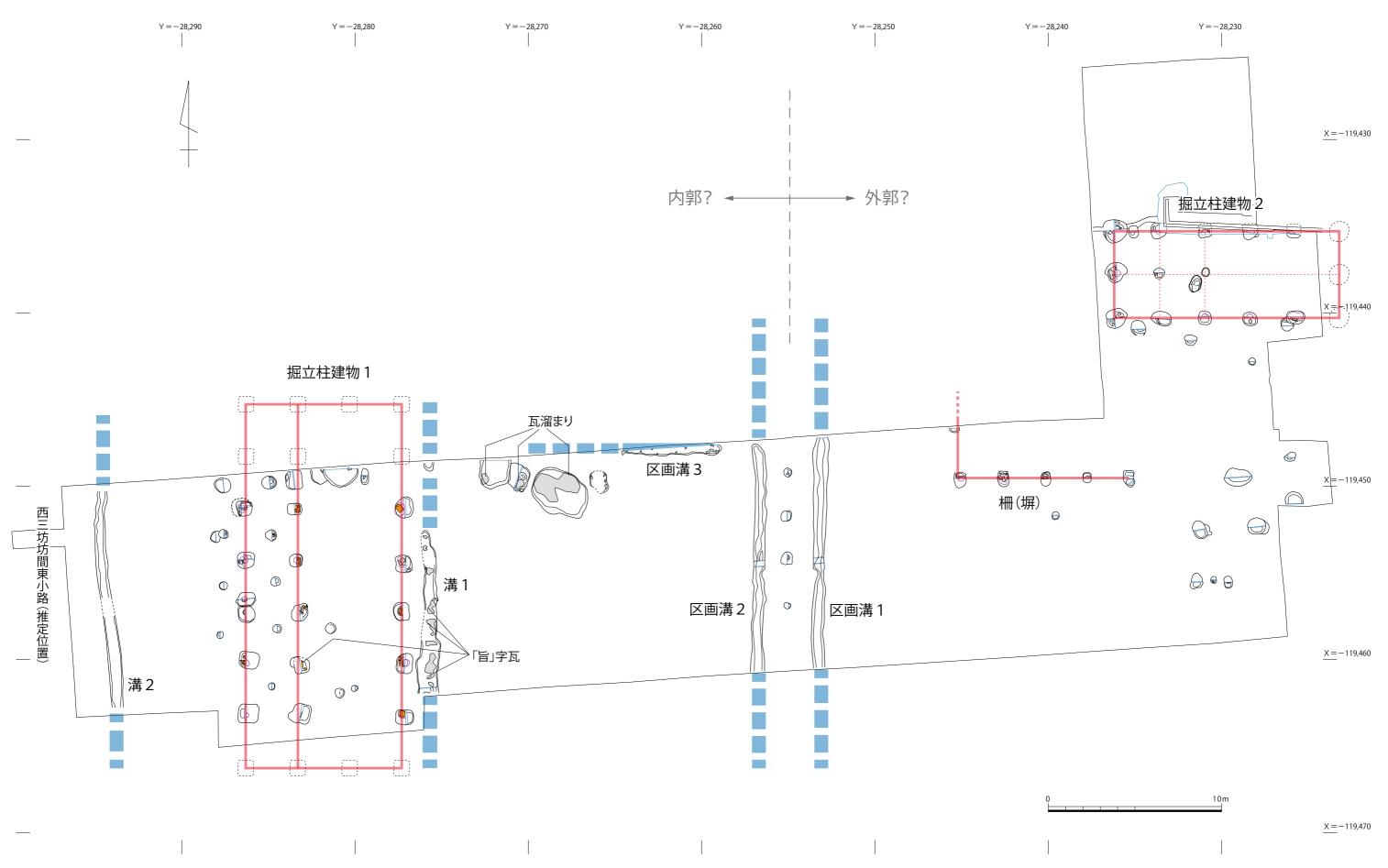


図2 長岡京跡右京第1177次調査 長岡京期の遺構配置図(1/200)

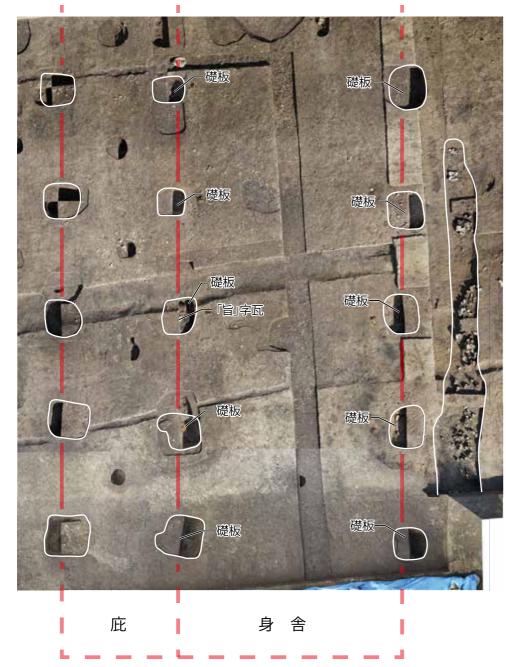


図3 掘立柱建物1 (南北7間、東西2間、西面に庇)

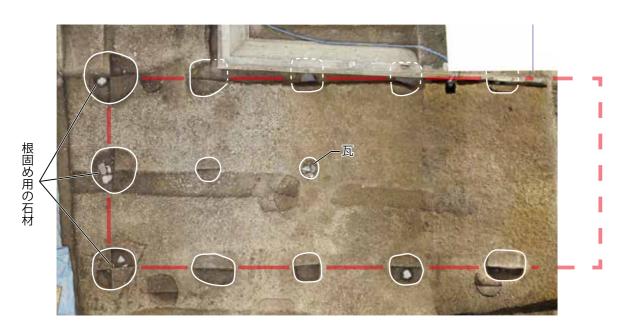


図4 掘立柱建物2(南北2間、東西5間)



写真 1 掘立柱建物 1 礎板を据えた柱穴



写真2 柵(塀)塼を据えた柱穴



写真3 掘立柱建物1 「旨」字瓦が出土した柱穴



写真4 溝1から出土した「旨」字瓦

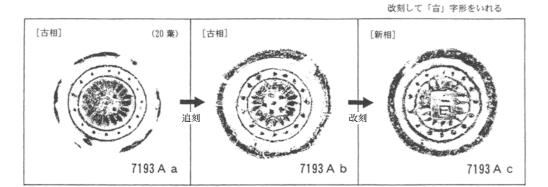


図 5 勅旨系軒丸瓦の変遷(山口均 2003「長岡京造営論ノート」『立命館大学考古学論集』|||より転載・一部改変)

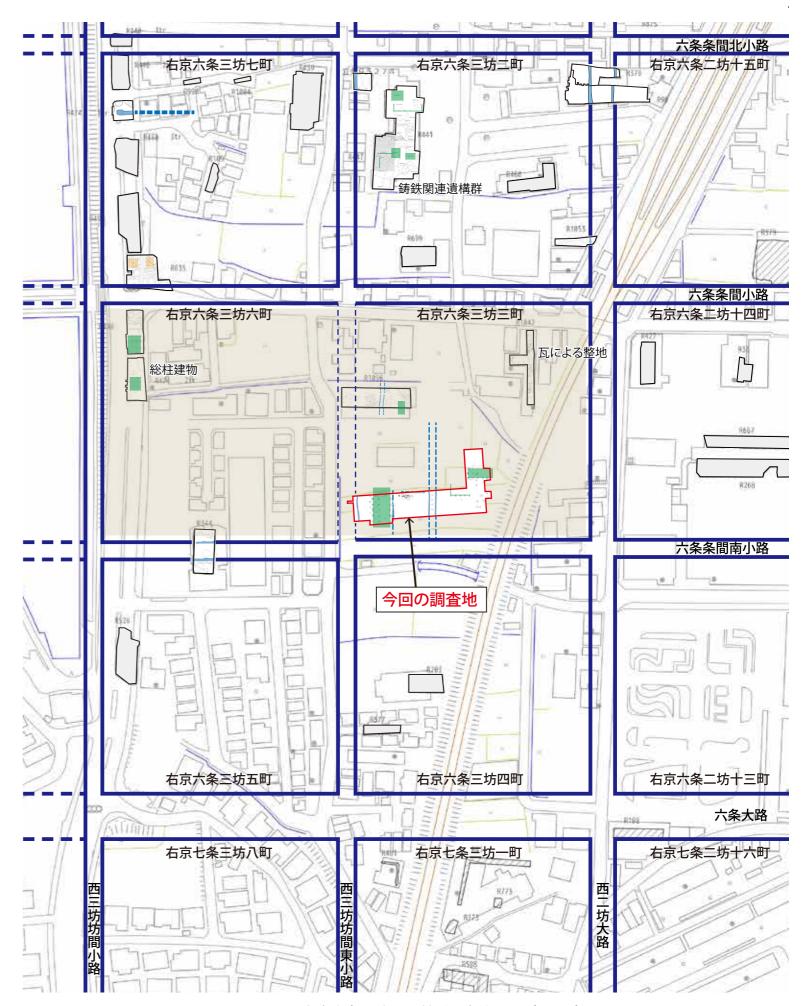


図6 右京六条三坊三町付近の宅地利用(2000)